

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：34448

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12277

研究課題名（和文）近世における中国医学の診断・治療理論と診察法の受容

研究課題名（英文）The Acceptance of Chinese Diagnosis, Therapy and Clinical Examination in the Early Modern Period

研究代表者

熊野 弘子（KUMANO, Hiroko）

森ノ宮医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：60720117

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の近世における中国医学の受容と展開をみるものである。診察・診断・治療に関する医学理論や具体的な疾患といった臨床的な視点に立って、日・中比較、新・旧比較検討を行った。長い歴史を背景に数多ある諸説の整理をしつつ、現代の東洋医学の臨床・教育へ還元することを目指した。中国医学を加工せずに受容した時期を中心にすることによって、また高名な医師を取りあげることによって、現在においても通用する東洋医学臨床に重要な点を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本・中国・韓国などアジアの伝統的な東洋医学は、現在まで受け継がれてきた長い歴史に裏打ちされた侵襲性の少ない医療である。悠久の歴史のなかで数多の諸説が生まれたため、本研究ではそれを整理しつつ、現在においても通用する有益な診察・診断・治療理論を検討した。

特に、受容した中国医学を簡便化・日本化して展開した江戸中期以降ではなく、それ以前の時期を中心とした。簡便化という加工を経ずに、純粋な中国医学受容の形を伴った医学のあり様や、とりわけ医学史上高名な医師が、そのまま受容する過程で、中国医学のどの部分に重きを置いて取りあげ、日本で展開してきたのかを探ることは、現代の臨床に裨益するものである。

研究成果の概要（英文）： This study examines the reception and development of Chinese medicine in Japan in the early modern period. From the clinical viewpoint of medical theory and specific diseases related to medical examination, diagnosis, and treatment, the representative made comparisons between Japan and China, as well as between the old and the new. While sorting out the many theories that have existed over the long history of Oriental medicine, this study aimed to apply them to the clinical practice and education of Oriental medicine.

By focusing on the period when Chinese medicine was accepted without processing, and by taking up renowned doctors, the representative have studied important aspects of Oriental clinical practice that are still relevant today.

研究分野：医学史

キーワード：中国医学の受容 中国医学の展開 伝統医学 東洋医学 東アジアの医学 古典医学 弁証 近世

## 1. 研究開始当初の背景

近年、伝統医学分野の国際標準策定の動きが活発化し、2019年5月、WHO世界保健総会にて国際疾病分類第11版(ICD-11)が採択された。ICD-11の伝統医学病分類・伝統医学証分類には伝統的な東洋医学特有の専門用語が記載されている。それらは約2000年前の『黄帝内経』やその他の中国医書に記されている用語である。

その『黄帝内経』について、研究代表者はかつて「『黄帝内経』における養生と気：先秦・漢代の諸文献と比較して」(『関西大学中国文学会紀要』30号、2009)を執筆した。中国医学の聖典とされ、中国医学のおおもとである『黄帝内経』は、特定の個人による医書ではなく、それまでの医学理論を総合した大部な医書ということや、中国思想も取り入れていることから、全体像を把握することが非常に困難で、また内容も高度な医書である。そのためか、中国・日本の先行研究において、一部を切りとって、特定の思想と関連づけられることが多かった。しかし、そのように偏った思想の医書ではないことを検討し、研究成果を発表した。

このように思想的な背景とも切り離せない中国医学であるが、思想的な理解も必要な難解さと悠久の歴史を有するがゆえに、様々な時代に、叙上の『黄帝内経』・『難経』ほか中国医学を代表する医書に注釈が付されたり、それらをベースとした医書が著されたり、諸説が混在するに至った。

翻って日本に目を向けると、日本が受容した中国医学は、意図的・自然的いずれにせよ変容している。日本の医者たちは重要と思われる箇所を中心に、中国から切り取り的に、抜粋的な受容をしていたが、曲直瀬道三(1500年代の医者)という巨星が存在した近世のこの頃はまた統制的な受容でもあったろう。道三は学校を創り、優れた教育者でもあったことから難解な中国医学を根気強く指導し、統制的に流布できた可能性はある。

しかし、道三没後しばらくして江戸中期頃から複雑で難解な中国医学理論への反動的な受容ともいべき簡便化のムーブメントが起こる。日本独自に展開していった部分が芽生えてきたのである。すなわち、受容した中国医学を簡便化してカスタマイズ加工して日本化するという明らかな変容が見られ、日中相混じった混合的な受容が増していった。鍼灸・薬方ともに中国的な東洋医学、日本的な東洋医学、折衷的な東洋医学、様々な流派が存在し、今日まで至る。

このように、約2000年間の諸説の重層がある。中国では、こうしたものへの古典的アプローチ研究はある程度整理されてきたと思われるとはいえ、この2000年間に中国で著された医書はあまりに膨大である。

とりわけ、受容してきた日本では特に、諸説の重層に加えて変容・展開も合わさった混乱がある。

諸説・流派が存在するのは珍しいことではない。医学においては、危険がなく有益であることが前提のうえ、各々の医療有資格者たる臨床家が各説・流派のやり方を選択して取り入れれば良いかもしれない。

ただ、臨床家や特に学生にとって、諸説の整理および各説がかつてどう使われどういう歴史的経緯で現在に至って今なお重用されているのかの背景の提示は有用である。

とりわけ、学生のいる教育現場では、ある程度の整理・標準化は必要である。上記の通り、中国から受容した医学を日本風にアレンジしたのも加わった混合医学は、層が厚くなってしまっている。当然、教科書では定説がある程度整理されているものの、臨床的にはもう少し補足が必要なこともある。だからといって、この厚い層をそのまま教えると学生は混乱するであろう。どの説が重用されたか、どのような経緯で今日まで受け継がれてきたのか、臨床的・教育的観点から整理する必要があった。

## 2. 研究の目的

本研究は、近世日本における診察・診断・治療の具体的臨床像を明らかにすることを目的とする。単に論文などの執筆による発表を最終目標にするのではなく、日々の教育・臨床現場へ生きた伝統医学を活かすことを目指した。

具体的には、日本医学史上高名な医者である曲直瀬道三などの医学を取りあげることで、我々現代日本人にも有益な医学を吸収すべく、泌尿器疾患・腰痛・頭痛といった具体的な症状について考察してきた。このように、現代でもよく見受けられる具体的症状を取りあげることで、高名な医者達によってどのように診断・治療が行われてきたのか検討し、現在の臨床現場で有益なものを考察することを目指した。

また、近年、東洋医学における心理面、つまり情志の失調などの心理面に特化した本が中国で刊行されるなど、注目を集めている。中国では「996問題」、「躺平族」(寝そべり族)に見られるように過労が社会問題化するほどである。自殺率が高い日本においてもメンタルヘルスは看過できない。日・中ともに重要なテーマである情志の失調に着目して東洋医学的にアプローチす

ることを目指した。

以上のような具体的症状に焦点を当てて診断・治療法を検討したほか、現代においても用いられている脈診などの東洋医学的な診察法に着目し、高名な医者たちの診察がどのようなものであったか、この点においても現在の臨床現場で有用である箇所に着目して考察することを目指した。

### 3. 研究の方法

歴史的な考察に加えて、現代の臨床現場・教育へ応用することも目的としているため、有用度が高いと考えられる高名な医者(1500年代の医者である曲直瀬道三などの道三流の医者や、1600~1700年代の医者である岡本一抱など、時代を代表するような医者)・その著書を取りあげ、そこに見られる診察・診断・治療の具体的臨床像を検討した。なお、受容した中国医学を簡便化・日本化して展開した江戸中期以降ではなく、それ以前の時期を設定した。

### 4. 研究成果

(1) 現代中医学には、診断・治療法の理論を体系化した「弁証論治」がある。それは漢代の医書『黄帝内経』をはじめ長年受け継がれ、現代になり「弁証論治」という言葉が確立した。日本では、曲直瀬道三が「察証弁治」として再構築して受容した。

曲直瀬道三・師筋(月湖の教えを受け継ぐ田代三喜が道三の師)・子弟といった道三流の文献を検討し、日本化しつつ中国医学を受容した道三流医学の内容を、頭痛など現代でもよく見られる症状を軸に臨床的な視点を持ちつつ考察した。

道三『啓迪集』や月湖『全九集』などは、徐彦純(朱震亨弟子)原著撰、劉宗厚続増『玉機微義』・朱震亨述、子弟撰『丹溪心法』・虞搏『医学正伝』・『明医雜著』・周文采『医方選要』といった明代撰・刊本を引用・参照し、また結果として間接引用・参照ではあるが、明代に限らず漢代からの『素問』・『靈樞』・『難経』・『脈経』・『脈訣』・『活人書』・『普濟本事方』・『三因方』・『儒門事親』を引用・参照して、頭痛について述べていた。

蓄尿病状・排尿病状・腰痛の場合についても考察したが、それらと同様の引用態度であり、すなわち膨大な中国医書ゆえに取捨選択しつつ引用・抜粋・要約・参照し、中国医学の諸説の採長補短という形で日本に取り入れていた。

うち、においては、陰陽・虚実・寒熱・表裏弁証といった基本的な八綱弁証に基づき、さらに臟腑弁証や三焦弁証なども関連したもので、総じて簡潔なものであった。においては、それらに加えて衛気榮血弁証も見られ、症状相関弁証も蓄尿病状におけるそれよりも詳しく取りあげられ、質量とも増していた。このように、それら泌尿器疾患において、現在の弁証論治に共通する「察証弁治」をいくつも見る事ができた。

そして、においては、現在でいうところの十二経脈弁証、臟腑弁証、病邪弁証、気血陰陽弁証、七情病機、五志病機などが見受けられた。それらは、陰陽五行説は当然のことながら、精気神学説などの中国思想を土台として含有するものである。腰痛における経脈・経筋の循環を考慮するための六経(脈)の弁別が行なわれていた。鍼灸治療の記載は豊富とはいいがたかったが、痛みの場所・走行を把握し、その上で経脈を意識して臨機応変に鍼灸治療を行なうことが示されていた。また、様々な原因によって発症する腰痛は、鑑別とりわけ脈診に重きが置かれ、外因・内因・不内外因おのおのが含むところの原因追及をするものであった。その一方で、症状鑑別の情報は少ないものであった。

それに対し、頭痛においては、現代西洋医学とも一部共通するような症状鑑別の比重が増していた。症状や病因が重要視されていたことが窺えた。また、頭痛を様々な角度から分類していた。病因によって当然用いる薬など異なるわけだが、寒熱の判断に注意喚起を促していたことからわかる通り、様々な病因がある頭痛の場合は、そこの判断を誤ると治療効果が出ない。そうならないための様々な判断アプローチを提供していたといえる。

頭痛患者には、まず危険な頭痛か否か見極めたのち、脈診し、そして内邪か外邪によるものか、傷寒かどうか、新(頭痛)か旧(頭風)か判断し、またよく遭遇すると覚しき偏頭風から強い痛みを呈することが多い眉稜骨痛まで網羅し、症状聴取を重視して病態把握したうえで治療法を提示するものであった。

なお、実際の医学上の継承はさておき、あくまでも文献のみの観点からは、. . . の場合と同様、においても田代三喜に比し月湖からの継承の方が窺えるものであった。

それから、現在の弁証論治でいうところの病邪弁証、病性弁証、気血弁証、経脈弁証、六経弁証(経脈六経・傷寒六経)、七情病機などに繋がる道三「察証弁治」が窺えるものであった。

このように、現在の弁証論治に通じる「察証弁治」が見られるだけではなく、現在の西洋医学的な考え・病態把握にも通じる高度さが垣間見えたと思われる。

以上、道三流間の医学の継承の流れをふまえつつ、道三の「察証弁治」・月湖の「類証弁異」など道三流が中国医学理論を選択的態度で受容し、日本化して再構築した臨床的理論を確認できたと思われる。

(2) 中国では中医心理学の独自性を提案し、その分野の研究が進められるものの、日本ではこうした伝統医学的アプローチを試みる研究、まして日本における受容・展開を見た研究は、科学的アプローチの研究に比べて少ない。そこで、日本で受容・展開されてきた情志の失調に関する理論の一端を、江戸時代を代表する高名な医家たる岡本一抱に焦点を当て考察した。岡本一抱『医学三蔵弁解』を取りあげて現在と近世、日本と中国を比較し、今も昔も用いられる有効な理論である内因病因論の一端を考察した。

2020 発表研究では、岡本一抱『医学三蔵弁解』に見える情志を中心に、その関連気機・臟腑・五行なども含め考察し、比較対象として現代中医学における情志も併せて見てきた。

現代中医学では、神があり、生命活動としての広義の神と、精神活動としての狭義の神がある。狭義の神には、元来の精神活動たる五神（魂魄神意志）と、外界刺激への情動反応たる五志（怒喜思憂恐）がある。五神のなかにさらに神がある。狭義の神のさらに一部の機能を意味する。この五神のうちの神が、他の四神の魂（肝）・魄（肺）・意（脾）・志（腎）を統率しており、精神活動を主宰している。しかし、五神・五志（七情）は、五臟（肝心脾肺腎）・五行（木火土金水）の分類に従う要素が大きい。

他方、岡本一抱『医学三蔵弁解』においても、五志は対応する五臟・五行の性質を引き合いに説明されていた。ただ、情志の大過による病は、各情志に関連するその臟だけに焦点を当ててもそれは「標治（療）」にすぎないので根本から治らず、根本から治療するには精神活動の根本たる部分、すなわち大本の神を主治せねばならないことを『医学三蔵弁解』は強調していた。これは、情志由来の病に対し、神に重きをおいた「本治（療）」を重要視するものであった。

標本治療におけるこの点は、現在以上に重きを置かれている考え方である。

また、『医学三蔵弁解』における情志の記述は簡潔であるが、そのなかで叙上のことに加え、各情志における気機・五行の性質が省かれず述べられており、これらが現在と同じく重視されていたことが窺えた。

以上、現代中医学と比較し、江戸時代を代表する医家である岡本一抱の『医学三蔵弁解』を考察することで、近世日本における中国医学受容と展開の一端および重んじられていた中医理論における論点を明らかにできたと思われる。

(3) 道三、師筋の月湖の書など道三流医学が中国医学から取捨選択して受容した脈診を臨床医学史的に位置づけて、いまの脈診のあり様を含めた現在の視座から新たに検討した。

曲直瀬道三『診脈口伝集』は、簡略な要旨のみの医書である。金元以降に流布した人迎氣口脈診を同書も採用するが、更に脈状を把握する場合、伝統的な二十四脈状を覚えることとともに、浮・沈・遲・数の四脈状を祖とすることを提唱していた。

有名な医学理論を輩出した金元医学に続いて大部な医書を輩出した明代医学を大いに取り入れた室町後期から江戸初期にかけて、日本の医学界は受容を拡大し、急速に発展していった。脈診に関しても同様である。

それら一連の流れのなかで初期に位置づけられる月湖『全九集』は素朴な叙述であった。だが、漢文で書かれた『全九集』の和訳・増補改訂を手掛けた道三本にいたっては一見、元を同じくする医書には思えないほどに大幅に追記をしていた。この道三流の脈診重視の流れは続き、曲直瀬玄淵との説や、仮託との説もある著者未詳の『脈論口訣』というほぼ脈のみを取りあげた医書に、中国医書とともに道三の医書が大いに引用・参照されて刊行されるに至った。この『脈論口訣』頃、脈診の最盛期を迎えたといえよう。本研究では、その最盛期に至る過程の一端を検討した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 熊野弘子	4. 巻 51
2. 論文標題 曲直瀬道三の察証弁治と中国医学の受容 頭痛を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学東西学術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 193-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 井上克人、藤田高夫、松浦章、熊野弘子、中村朋美、陶徳民、桑野梓、豊田郁、中谷伸生、末村正代	4. 発行年 2020年
2. 出版社 関西大学	5. 総ページ数 296
3. 書名 東アジア圏における文化交渉の軌跡と展望	

1. 著者名 大形徹、熊野弘子ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都大学	5. 総ページ数 未
3. 書名 東アジア伝統医療文化の多角的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------